

北越雪譜

二編夏

農商省  
圖書  
號  
冊

清印

五  
第  
二  
冊

大政官文庫

和書門

一六〇號

七冊架函

內閣文庫

和書類

一一六〇號

七冊架

一七五函

內閣文庫	
番號	和 11160
冊數	7 ( 5 )
函號	175 80

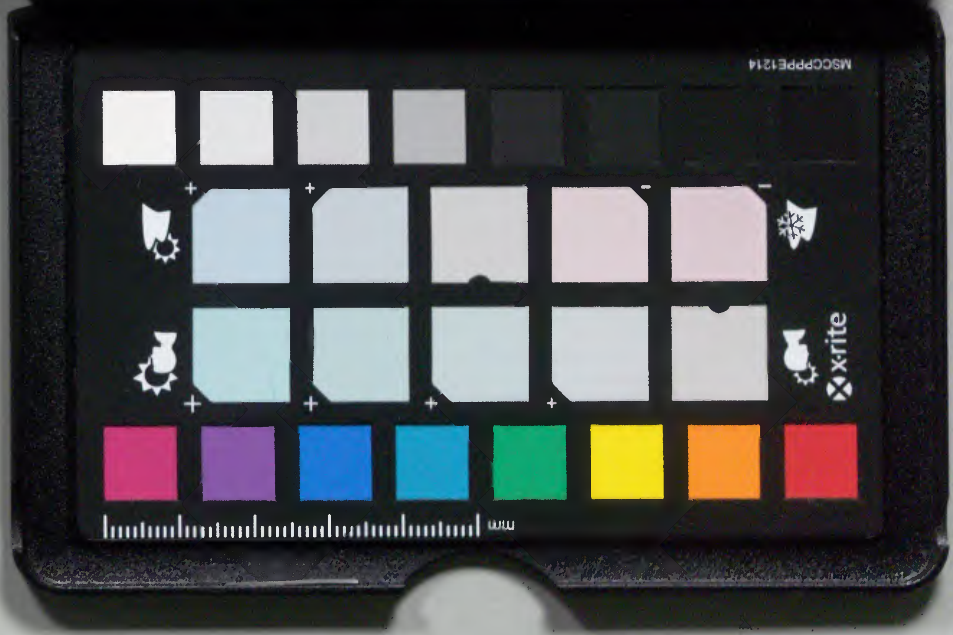


A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





北越雪譜二編卷二目錄

明治九年購求

○雪類ゆきるいは熊くまを得る

○雪類ゆきるいの難あはれ

○雪中ゆきなかの葬式まうしき

○龍燈りゆうとう

○芭蕉翁ばしやうが遺墨いづく

○芭蕉ばしやう略傳りやくでん

○オセ成おせなりの容よう貞ちか

○化石かしやく溪たに

○龜かめの化石かしやく

○夜光やこうの玉たま

○餅花もちばな

○齊さいの神かみ功こう進しん

○齊さいの神かみ祭まつり事こと

○天てん歎なげ羅らの始はじ原げん

○煉羊れんやう羹かうの起おこ立たて

○雪中ゆきなかの狼おおかみ

通計十六條

雪譜

雪譜二編卷二

目録



本舖近刻

○骨董集三編二卷四編二卷

右醒齋京傳先生遺稿京山人百樹翁補訂

○和漢印章考三卷 百樹翁著

○女粧考前後六卷 全

○古今の近古小至るまじく古図を載古各と引て説を

下し女の風俗不係りたる事ハ包羅輯載して餘こまじく且国字

の昏るまじく婦人乙夜の覧不供す了蓋茲本編雪譜の餘

帝爰は有と以姑近刻二家の著目と拳伏請

雲願の諸賢刊は先るの竈評是祈

江戸 書賈 文溪堂 謹白

北越雪譜二編 卷二

北越 鈴木收之 編選

江戸 京山人百樹 増修

○雪類は熊を得

酉陽雜俎云熊膽春ハ首ハ在リ夏ハ腹ハ在リ秋ハ左の足ハ

あり冬ハ右の足ハありと云々余試ハ獵師ハまじく問ハ

熊の膽ハ常ハ腹ハありて四時同トト云々蓋漢土の熊ハ酉

陽雜俎の説のまじく凡獵師山ハ入りて第一ハ欲ハ処の物

熊あり一熊を得まじくその皮と云々大ハ小ハもまじく大ハ

金五兩以上ハ云々獵師の欲ハまじく熊ハ猛ク且

智ありて得ハ不易ハ云々雪中の熊ハ皮も膽も常ハ倍ハゆえ

雪ハ穴居ハ云々獵師ハ力ハ裁せてまじく捕ハ種ハ



の術ある事初編に記せりたまへく一態を得るとも其儕は價と  
 分りも利得薄しとさきごとて雪中の熊一人の力にて得事  
 難しとぞ○茲は吾が住近在は后谷村とあり此村の弥左  
 工門といふ農夫老るる双親年頃のぬがひよまらせ秋のそとめ  
 信州善光寺へ参詣させけりさてある日用あるとて二里をり  
 の所へゆきたる苗守隣家の者過て火をせしとちまら軒は  
 うつりけむハ弥左工門が妻二人の小兒とついで逃去す命一ツを  
 助りけるのそ家財のそとぞ目前の畑とありぬ弥左工門ハ村ハ  
 火災ありとさきとて走飯りしハ今朝とて家ハ灰とありてたゞ妻子の  
 无支をよろこぶのそ夫婦心正直とて親も孝心ある者ゆゑ人こそ  
 を憐れまづとぞとらく我が家ハ居るがとて奨る富農もあつて  
 けるうづもくハ奴僕の業をとりても恩は報ゆとぞ双親飯り来りて

味成双て人の家ハ在らんハ心も安らうとて諾す竊ハ田地を分る價  
 入るその金で假家を作り親も飯アそ住けり草と刈鎌をさし買  
 求るほどありけむハ火の為ハ貧くありし小家を焼る隣家一對ハ  
 て一言の恨といふ守交り親むこと常ようさうさうたりかくてその年も  
 くとて翌年の二月のそとめ弥左工門山ハ入て薪を取りしとあると  
 谷ハ落るる雪顔の雪の中よきハくく黒き物有遙ふととを視て  
 も一人のなごもふうとさき死しとるやと幸とて谷より是と復さ  
 ハ稀有の大熊雪顔ハ赤殺したるありけりハ雪顔といふ事初編ハ  
 くらく記さるるまじく山積りたる雪二丈もあまるが春の陽気下より  
 蓋て自狀ハ碎け落る事大磐石と轉ハおとさとの如しとさきハ遇  
 人馬ハさうあり大木大石もうちおとさるるさきハ熊もこそあら  
 是とさるるけり弥左とぞハよきものをさしつけりすと大よ悦びはと







下と往来せらばホウラあまを用心まぐー他国の人をよ死  
たる石塔今も所々ありおるるぞしく

○雪中の葬式

吾が国小雪吹といふハ猛風不意に起りて高山平原の雪と吹  
散しその風四方ふきまきめぐるて寒雪百万の箭を飛ぶ如く  
寸隙の間をも許さばふきまきめぐるて寒雪百万の箭を飛ぶ如く  
まて少時小半身雪小埋まて凍死する夏まももつるごとく  
秋ふきハ晴天も俄もゆるり二月も三日も雪あまてふきまき  
事あり往来ももつる為小らまること毎年あり秋時は臨んで死  
せしもの雪あれのやむを待も程のあつものゆゑせんく雪あ  
れ犯て棺とせし事あり施主ハいつやうも志のふつる他人乃  
困苦事見るもきものごとくありこれ雪国ハツの苦状といふべし我江

戸小逗留せしるる旅宿のちりきあつるふ死亡ありて葬式の日大  
嵐あつる宿の主ももつる往とて兩具きいへるあつる今日  
の仏ハいつある因果ものぞわかると嵐は値て人は難義をか  
つるあつるいとも極楽ハいつあるあつるあつるあつるあつる  
て吾が国の雪吹は比ぶまといと安しとおつる

○龍燈

筑紫のあぬ火といふ古哥ゆもあまよとむりよりこの名たぐあま  
祐く人のある所あり其の勝るさまハ春暉ハ西遊記はあぬ火を現  
たりと詳よあるせり其あぬ火といふ世の竜燈のたぐひあづ  
我國蒲原郡は鎧湾と云東西一里半南北一里の湖水  
毎年二月の中の午の日の夜西の下刺より丑の刺頃まで水上に火然るを  
里ハ鎧湾の万燈と稱り現る人多し余が友人と云るをきしハ



西道記云々々々つじのちぬ火とちかぐさまあり近年湖水を北海へ  
 おどし新田とあり西多湖中の万燈が今人家の億燈とをまじり又我国の  
 八海六巔ハツの地あり依て山の名手絶頂ハ八海大明神の社あり八月  
 朔日を縁日と山まのちる人多し此夜ふかきと竜燈あり其来る所と見  
 る人なりとふおと竜燈といふあおなく春夏秋あり諸国ハある夏  
 諸書ハあるうを見えふのぐまじちかぐさまと海より出山よりいづる  
 毎冬其旨其制限ありある事甚奇異あり竜神より神仏供と云  
 普通の流ありとあるふゆき竜燈の談あり少く竜燈を解き流あり  
 ハ姑くあると好事家の茶活又供す  
 我国頸城郡米山の麓ニ医王山米山寺ハ和同年中の創草あり古  
 小薬師堂あり山中女を禁み此米山の腰と米山嶺と云越後北海の驛  
 路あり此辺古跡多し余先年其古跡を尋んとて下越後小あまひ

時新道村の長飯塚知義の語ハ一年夏の頃雲のおふ村の者ども必  
 米山のむらし小薬師へ系詣の人少りあるため御鉢と云所小屋ニツあり  
 我の小屋一宿ある是日六月十日也此御鉢と云所(竜燈のおる夜あり  
 おひまうけとて竜燈と云事よとて人あまをりし西の刺とちり頂ぐ  
 ともおききりあまじふ大なる手鞠の如く小なるハ雞卵の如く大小も此御  
 鉢と云ありをさすおと飛行するをあるハちやうあるハちるそのさぬ  
 心あり遊ぶが如く其光りハ螢火の色ハ似たりつあくも光りあつてもひるあり  
 无拜ひやぐらしてあまじくもあまハあくあまありてかぞふにあり小や  
 の入り口と人ひとまりて覗みよとて人ありちあひるやう老大小の竜燈  
 ニツツ小屋の妻七八間さまふまきしをかきひりあすしと云ハ形ち鳥の  
 やう見え光り喙の下より放つやうあり接近くあかかあもたふ  
 視るけんとかちり小あまハあふとてやうふ飛むと見り此夜山中







芭蕉翁訪凍雲図



北走聖言二編中

六ノ下ノ巻ノ終

凍雲を  
たのびて  
凍摘平  
いつる  
心と  
枕  
大友成



七世聖言二編中

二ノ下ノ巻ノ終



ふーのちるよ吾が不学とも忘として越雪の奇状奇蹟と記す  
 後来よ示し且越地小係り一事ハ姑く載て好事の語柄とす  
 さて元禄の頃高田の御城下小細井昌庵といひ一醫師ありけり  
 一ふ青庵といひ俳諧を善して号と凍雲といひひとせをせぬ翁  
 奥羽あまぎののつり凍雲とたづねて「菜欄」よむこの花を草枕と  
 発句志けしと凍雲とありあす「秋」のすゝもを巻あぐる月「秋時」の  
 をせぬが肉筆二枚ありて一枚ハ唇損と覚し淡墨をのりて一抹乃  
 痕あり二枚とも小昌庵主の家ふつとを后小本唇ハ同所の親族  
 三崎屋吉兵衛の家あつと唇損のハ同所五智如来の寺ふのこまうら  
 るふ文政のころ此地の 邦君風雅とこのと玉ひのちかかの二枚持主よ  
 りて奉りけしハ吉兵衛ハ常信の三幅對ハ白銀五枚りの寺「もあつき賜あ  
 りて今二枚ともハ 御藏とありぬと友人葵亭翁がものがたりし

葵亭翁ハ蒲原郡加茂明神の修験宮本院名ハ義方吐醋と号し  
 又無方斎と別号を隠居して葵亭といひ和漢の博識北越の聞人  
 あり芭蕉が件の句むのふ見えさしとあるせり  
 百樹曰芭蕉居士ハ寛永廿年伊賀の上野藤堂新七郎殿の  
 藩小生次男あり寛文六年歳廿四もして仕絆を辞し京ふして季吟  
 翁の門に入り春を北向雲竹よ学ふとて宗房といひ季吟翁の  
 句集のりの中と宗房とあり延宝のすゝをりて江戸小末り杉風が  
 家小寄小田原町鯉屋 藤左エ門 剃髪して素宣といひり桃青ハ后の名あり  
 芭蕉とハ草庵小芭蕉を植ゆ名入よりよびる名の后ハ自号  
 あつり翁の作ふ芭蕉と移辞しつ文ありその終りの辞ふ「たまく  
 花さくも花やうあらず茎太けきとも芥ふあらずかの山中不材の  
 類木わたくてその性よ僧塚素ハ是ハ小筆を走らし張横渠之



新葉を見て修学の力とせしとあり予その二ツをとり守た。以蔭よ  
遊びて風雨小破も易きを愛も。をせぬ野分して盪小雨とき夜

引 此芭蕉庵の旧蹟ハ深川清澄町万年橋の南詰小対ひる

今或侯の庭中余芭蕉年表一名  
を世伝年代記とのふ小在り古池の趾今小存せりとも

考証未定ゆゑ、刺とやうな守 翁身を世外小置て四方小雲水一江戸

小趾をとり守終つた元禄七年甲戌十月十一日 旅小病て夢ハ枯

塾をかけ廻るの一句をのりて浪花の花屋が旅囚小客死せり

是舉世の知る処あり翁が臨終の事ハ江州粟津の義仲寺

小のこゝに榎本其角が芭蕉終焉記小目前視るが如く小記せり

此記を視る小翁のこゝに菌毒小ありて刺とあり九月晦日より

病小臥僅よ十二日ありて下泉せり以時病床の下よありし門人

木節 翁小葉をあらへ。去来。推然。心未考。之道。支考。吞舟

。文章。乙州。伽香以上十人あり其角ハ以時和泉の淡の輪と

りふ所小ありしが翁大坂やまきりて病ともありて十日小あり

十二日の臨終小遇つて奇遇といふ。以上終焉記 其角が終焉記の

文中小 以記義仲寺小施板ありて人のむち。義仲寺やうつして葬礼義

信を及し京大坂大津膳所の連衆彼官従者までも以翁の情と

慕ふるをとり招ざる小馳来る者三百余人あり淨衣その外智月と

百樹云大津の米屋 乙州が妻縫たてて着せまぬら守 又曰 三千餘

人の門葉辺遠ひとり合信する因と縁との不可思議いふやとも

勘破者ごご 百樹おのりて孔子よ三千の門人ありて門小十

哲をいごす芭蕉よ二千の門葉ありて庵小十哲とよふ門人あり

至善の大道と遊藝の小技と尊卑の雲泥ハ論よおよびさる

とも孔子七十ありて魯国の城北泗上小葬て心喪と服する弟



子三千人芭蕉五十二やして粟津の義仲寺小葬る時招ざる  
 小来る者三百餘人是以人小師たるの徳ありしをとおもふ  
 蓋芭蕉の盆石が孔夫子の泰山小似たるをいつあり芭蕉曾駟  
 の風輕薄の習少しもあるし吟咏文章おても志らる共翁の  
 其角がいついごとく人の推慕する事今小於も不可思議の奇人  
 ありされば二句一章とことども人こそ成句碑小作りて不朽小傳ふ  
 る事今猶句碑のあらざる国あり吟海の幸祥詞林の福禎文  
 藻よ於て其人の右小出る者ありささる本文よもつるまじかりそあ  
 小いひまてつる菜楠の一句の墨痕も百四十余年の后小つりて  
 文政の頃白銀の光りをををあらさるる論外不思議といふ  
 蜀山先生嘗謂予曰凡文墨とつて世小遊ぶ者画ハ論せず死後  
 よつり一字一百銭小当らる身とあつる文雅幸福足へつるを

はまき先生ハ今其幸福あり一字一百銭小当らる事嗟乎難れ  
 ○さてまき芭蕉が行状小傳ハ諸君小散見して普く人の知る  
 所ありまきとも翁の容見ハ拳世知る人あつるべさまは爰小  
 一証を得るゆゑ此雪譜ハ記載して后来小示さハかる瑣談も  
 世小埋宛せん事のをしけむいざ狀ハとて雪小搏寸筆の老婆心  
 あり○まき小二代目市川團十郎初代段十郎の排号と嗣で  
 才牛との后は相違とあらたむ元文元年あり以相違ハ正徳享保交  
 ○寛保を盛小歴する名人あり妻をおさむといひ排名を翠仙といふ  
 夫婦とも小俳諧と能く文雅を好み以相違が日記のやう小春  
 残したる老の樂といふ隨筆あり二百四五十席の自筆あり嘗相外ハ  
 を狂奇生真顔翁珍存するべ懇望してかの家より借りたる時  
 余も亡兄とこの小説一ことありまきとこのあつ小芝居土用也との



うち相筵一蝶が引船の絵の小屏風と風入とある旁にて人  
 参をまきまきとあぐら敷繪おむかをとおひいひひて独言いひる  
 を記しる文ふ「我も幼年の頃をいめて吉原を見たる時黒  
 羽二重よ三升の紋つけもろり袖を着て右の手を一蝶ゆひら  
 せ左りと其角ゆひらして日本堤を往し事今ふ忘すれり  
 いせふ名をさひびうせとれど今ハれまき入あり我ハ幸ふせふありて名  
 もまこ頗る聞えり中畧今日小川破笠老まぬらむむの  
 ちちのせらまこころぬらふ芭蕉翁ハをとおのてうまといふあり白  
 く小兵あり常ふ茶のつむぎの羽織をまらま嵐雪よ其角が所  
 ついでとらまよとのまづうふいそまらとらまたり」  
 を今目前小見ろが如し翁の門人推然が作とらふ翁の肖像ありい画幅  
 の肖像せよ流傳するものハ世説とあそせ見る  
 小川破笠俗称平助社羊の頃放蕩あて嵐雪と俱ふ俗称服部  
 彦兵衛

其角が堀江町の居小食客たりし事件の老の樂又破笠が  
 自記おも見ゆ破笠一ふ笠翁まて印觀子夢中庵等の号あり  
 絵を一蝶小学び俳諧ハ其角と師とて余が藏する画幅小延享  
 三年丙寅仲春夢中庵笠翁八十有四筆とあり描金を善して  
 人の相をなめず別ふ一趣の奇工を為す破笠細工とて今ふ賞  
 せらる吉原の七月創て機燈と作りて今ふ其余波を残り傳詳  
 ありともそのとてわらせり

○化石溪

東游記よ越前国大野領の山中小化石溪あり何物あても半月あ  
 るいハ一月あ溪小浸しおけハかあり守石小化石す器物いさらあり紙  
 一束藁あてむきいさら石小化石を見たりとらせり我ハ越後も  
 化石溪あり魚沼郡小川の在羽川とら溪水ハ蚕の腐たるを流し



一夜ふりて石ふ化したりと友人葵亭翁がからまきかの大野領の化石溪ハ東游記の爲小名高けきとも我う国の化石溪ハ世々なられが又近江の石亭が雲根志変化の部小編入あり語云越後國大飯郡小寒水滝といふあり此処深山幽谷ふりて互寒の地なり此滝坪ハ万物を投てりおひ百日を過ぎしと石ふ化すこと滝坪の近所あり諸木の枝葉又ハ木の実その外生類までも石ふ化するを得るとして予去る頃汝滝の石を取らせし人ありて見よ常の石ふありて全跡鐘乳あり木の葉あり石中ふありて則石あり雲林石譜ふりて鐘乳の擣化して石ふありなり云收之葉る小越後小大飯郡あり又寒水滝の名もきき守人あり語るとある傳聞の誤るなり蓋北越奇談小会津小隣る駒ヶ岳の深谷小入ると三里ありて化石溪と名付る処あり虫羽草木といふても

溪小入りて一年と歷むるも化石して石とある其川甚苦寒なりて夏も涉らざる如く又蕪門岳の北下由郷の深谷も化石溪あり云々雲根志の説はこれらの所を聞誤るものらん

○亀の化石

吾う同郡岡の町の旧家村山藤左五門ハ余が壻の兄あり此家ハ先代より秘藏する亀の化石あり傳てり近き山間の土中よりと掘得たり実化石の奇品あり茲小図を奉て弄石家の鑑金と俟百樹日件の図を視る小常みある亀といふ形状少く異ありあり依て案る小本草ハ所謂秦亀一名筮龜ありハ山亀といふ俗ハ石龜といふ物あり秦龜ハ山中小居るものありゆゑは呼で山亀といふ春夏ハ溪水小遊び秋冬ハ山小藏極て長寿する亀ハ是ありとて又筮龜と一名あるハ周易小亀を焼て占ひ



甲之圖



堅 曲尺五寸五分  
橫 四寸五分 厚二寸六分  
重 八百目

腹之圖



蟹之化石



腹之圖



牧之筆圖



一の多亀ありとぞ件の亀の化石本草家の鑑定を得て秦  
 亀あつて一層の珍を増て山まで掘得たりとあるは秦亀の  
 ちきやうあり化石といふものあまゝ見し多し小きものあ  
 りいまた体全も稀あり國の化石ハ体全く且大あり珍  
 とす。余先年俗ふり大和めぐり志するまゝ半月あ  
 まり京にあつて旧友の画家春琴子小就て諸名家とたつ  
 糸一時鴻儒の聞高き頼先生名襄字子成山陽号通称頼徳太郎も訪ひ坐談化  
 石の事おぼのび先生余は蟹の化石一枚と恵その色枯すし  
 て生が如く堅硬とてハ石あり潜確類各又本草三才圖會等  
 ふりて石蟹泥沙と俱に化して石ありとあるア一益養  
 する石菖の下あやふ水中ふ動が如く亀の徒者ふ其圖と  
 出す是も今ハ名家の形見とありぬ

○夜光玉

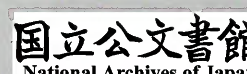
雲根志灵異の部小曰予が隣家小壮勇の者あり儀兵衛といふ  
 或時田上谷といふ山中ふ行て夜更て飯をふむらうある山の澗  
 底より青く光り虹の如く昇てまゝハ天不接る以男勇漢あれ  
 無二无三草木を分けて山と越谷をつらりてかの根元をさぐりたる  
 小たが何の異る事もある石ありひろひたりて背お負ひ飯をふ道  
 まから光るもの前の如く甚だ夜道の旁をたすりり曉の頃我が  
 家小着ぬ件の石を軒の外直置朝飯をたすりて彼の石を見  
 んとすし小石ありいふせし事やらんとさめぐふたつみりむれも  
 行方志すとある又本國甲賀郡石原潮音寺和尚のわのぐり  
 近里の農人畑を掘居し小拳をたすり石をかりいせり以石常の  
 石よりハ甚だうらうらうて取りがたりぬ夜ふ入りて光ること流星の



如ト友のりよ是ハ灵石あり人の持ゆのふあら守家ふあふハ必災あふ  
 一をゆくおやうてまづア一と意をきくて芥とりて打碎と竹  
 やべの中よきてり其夜竹林一面小光る事数万の螢火の如一翌  
 朝近里の人きくつて集り来り竹林をたづひるふサ一のころ  
 までも一石も有る事あり又筑后国上妻郡の人用ありて夜中近  
 村一行よッの小川ありかちりせりふららん光る物あり拾ひ  
 どりてまづハ小石あり翌日さる方ハ献すまをくし失りてまづ  
 一条 是等ハ他国の事あり我ハ越后ふも夜光の玉のあり一事あり  
 全支 新登田より 浦原 東北加治とらふ所と中条とりふ所の間路の傍田  
 の中は庚申塚あり塚塚の上ハ大さ一尺五寸さるりの四石と鎮し  
 てこれを祀る状石との先農夫屋の後の竹林を掃除して竹の根  
 を掘るとてかの石一ツを掘得りその色青とありて黒く甚ぞ

あめらつあり農夫らまをりて藁をさつ盤とあす其夜妻庭ふ  
 々々燦然として光る物あり妻妖怪ありとして驚叫家主杜夫  
 三五人を伴ひ来りて光る物を打ふ石あり皆りて怪と石と竹  
 林ふ捨つその石夜毎小光りあり村人おそきて夜行ゆのふ依て  
 状石を庚申塚ふ祭り上小泥土を塗て光をかす今猶苔むして  
 あり好事の人この石を乞へども村人崇あらん度と畏てゆきびとを  
 又駒ヶ岳の麓大湯村と行尾村の間を流るる溪川を佐奈志川と  
 ついひせ渴水せ一頃水中ハ一点の光あり螢の水よあつて如  
 敷日処を移す守一日暴雨ハ水増て光り一物所を失ふ后四五町川  
 下子光りある物螢火の如一其地山中あまハ村夫等昏愚やして  
 夜光の玉ある事を乞ふ守敢てたづひむとむる者もあつて一不其秋  
 の洪水ハ夜光の玉ふびあつて所在を失ひとぞ

以上北越  
 奇談の説  
 備









たりん身より、我先よ川へ飛り光りものを採りあてて、かづき  
 あげも我ありきつと、おれがむらひ、お持さんよあつあつといふ  
 く、お兄がものまう、弟がのまうと口論やまど、終つてあひまう  
 ひをも母やうくよれしつめあつて、光る石を二ツふ破りて分つて、  
 り弟さうとて、明玉をとり、銀治まる鑽の上ふのせ、鎌をよて  
 力まうせて打つと、明玉碎破内ふ白玉をとり、かづきも  
 砕け水ありて四方へ飛散り、其夜水のころ、光り輝く事、螢の群  
 うら、如くまう、二三夜やしてその光りも消失けり、つて、お頑愚の  
 手ふあり、稀世の宝玉、鄙人の一槌をうけて亡ひ、  
 玉も人も俱ふ不幸と、つて、語らむ、牧之案よ、橘春暉著る  
 北園瑣談後編の二、藏石家の事と、條ふ曰、江州山田の浦の木之内古  
 繁伊勢の山中甚作大坂の加嶋屋源太兵卫其外、三都の中の

好事家侯國の逸人、藏石小名の高き人、近年夥し、余も諸家の  
 奇石を見、皆一家の藏る處、三千五千種、小いもの多き中、  
 目を尽してやうく、眼をみる、夏を得る、小いもの多き中、  
 も格別、小目をおどろ、すむら、珍奇の物、无力のあり、加嶋屋  
 源太兵卫かの、つて、ふ過、一年北国より人あり、て、奉の太さ、乃  
 夜光の玉あり、よく一室を照す、よき價あり、賣んといひ、うそ  
 即座、小其人、托して曰、其玉、未だ、暗夜、その玉の入り、箱  
 の内、ぐり、白きやう、小見え、おの、金五十兩、ふり、つて、又、その玉  
 わく、闇夜、小太、ある、文字、一字、あても、読え、ま、おの、金百兩、あつ、む  
 又、舂、扱、よむ、むら、むら、三百金、い、つて、一室、を、と、ら、む、吾が  
 身上、の、つ、つ、の、力を、尽して、求む、つて、媒、つて、玉、つ、つ、と  
 い、い、が、その、もち、あ、の、便、り、ぬ、や、ぬ、空、言、い、て、あり、し、と、思、つ、る



云云此文段ハ天明年中藏石の世ハ流行たる頃加嶋屋が話を  
 そのまゝハ春暉が后よある一たるある一とて又余がかり銀冶屋  
 が玉のちねしをききしハ文政二年の春あり今より四五十年以前  
 とあるハ銀冶り玉を碎きたるハ安永のすゑなり天明のたゞめ  
 あるハ一狀りともいハ藏石の流行する頃あるハかのしまやが  
 話ハ北國の人一室にたらし玉の入りものありしとハ一ハ我國の  
 縮商人あるハかちやの玉の度をききしとて商ハ口をいハ一ハ  
 らしとすあるハ小玉ハくききしとてかハまやハ答ハざりしとや  
 ありハ十和が玉も楚王を得しとて世ハもどてと右ハのせ  
 たる夜光の話五ツあり三ツハ我が越後ハあり一ハ事ハありいづれも  
 世ハいしとす嗟乎惜むべし  
 百樹曰五雜組物の部ハ銀冶屋がをありハ一ハ類せる度あり

明の万曆の初國中連江との所の人路を割て玉を得しと  
 とも不識るを意する珠釜の中に在て跳躍して定ず火  
 光天小炷里人火事あると驚き来りてとてハ救ふ王と意  
 するものゆゑと聞て釜の蓋と啓て視るとハ己ハ玉ハ半枯る  
 其珠徑一寸許眞ハ夜光明月の珠あり俗子ハ厄せらるる  
 事悲夫と記せり又曰五雜組ハ魏の惠王が徑寸の珠前後車  
 珠照こと十二乘の物むりの事今天府ハも夜光珠ともし  
 と明人謝肇淛が五雜組ハ一ハ神異記ハ洞冥記ハも夜光  
 珠の度見るとも孟浪ハ属す古今注ハハも大なる  
 鯨の眼ハ夜光珠とあるとハ一ハ十和が玉も割之中果有玉とい  
 一ハ石中小玉を孕たる事銀冶り碎る玉十和が玉ハ類せる  
 趙の惠王ハ夜光の玉を秦の惠王が城十五と以て易んとハ



加鳥屋が北国の明王を身上尽しし買人と約せし小類せり  
さて又癸辛雜識續集下卷小機婦糸を水ふひしむきしる

小夜中白く大なる蜘蛛くもをとりてその水をのむ身小光り  
をとりかか婦人くもを見ても大なる蜘蛛くもを置てその蜘蛛

蛛をとりて小腹小夜光珠在たき彈丸たんがんの如しと云るせり  
事ことを前文小夜之老人が引くる北越奇談王の部は越後ありし事とて

ゆせしその事癸辛雜識よりしむちがりしおのふ癸辛雜識ハ唐本  
あり且又容易し得るべき各ふき北越奇談の作者裕子の目は奇と

云ふ人としてたむむは越後の事としてかきこくことありし  
癸辛雜識續集下卷都下より得がけは本各哉 又増一阿含經第卅三

見る中ちゅうの博識は傳聞あるべき 又増一阿含經第卅三 等法品  
第九 轉輪聖王の徳よそなるをりしる一尺六寸の夜光摩

尼室にむろの彼国十二由旬を照すとあり文多けしあけす蓋一  
由旬ハ異国の四十里あり十二由旬ハ日本道六十六里あり一尺

六寸の玉六十六里四方と照をハ奇異とりしる一轉輪王此王  
と得て試し高き幢の頭小擧著ける小人民等王の光りと

もまが守夜の明あけとありしむのく家業とてめらりと記  
せり此事碩学の聞高き了阿上人の語ふきしてかの經と借

得て読よみしむを夜光の玉の親王ありしき  
餅花  
餅花もちかは夜よるハ鼠ねずみがより野山ののとハ其角つのがまののそすま

了江戸あどの餅花ハ十二月餅搗もちつきの時もちまお作り歳徳の神  
棚たなはさしむる俳諧はいかいの季きハ冬とす我國の餅花ハ春あり正月十

四日までを大正月おほしげといひ十五日より廿日までを小正月こしげといひ是我  
里俗さとの習なせありして二月十三日十四日のうち小門松こかどのたがり

と取とり拂はらひ 我國長岡ありしむてハ正月七日ふかぎ  
餅花と作り大神  
宮歳徳としとくの神夷えいあのみ餅花もちか一技ひとてつつ神棚かみだとてその作り



西遊記二統卷之中

剛夫得名玉圖

文海堂藏



西遊記二統卷之中

三十一



やういづつ木やう木あるひ川揚の枝をとりてまふ餅と  
 三角又ハ梅梅の花形ふ切たる紙かの枝まきあるひハ團子と  
 もまきこれに蚕玉とよ稲穂又ハ紙めて作りたる金銭編あ  
 きいともいづつこのひ紙形と紙めて作り農家やハ木とけり  
 て鋤鋤のたぐひ農具と小さく作りてもちまきの枝やのくるま  
 ておのましく家業ふあつるものひあつて紙書とまこの業  
 の福とりのの祝事ありもちまきと作りおわつてまきの  
 手業あり祝いとて男女ともうちまきつて声よく田植哥と  
 うまきとまきけい夏うこいへ家のよき雪のそやきまきよ  
 かとおのよ雪国の人情あり紙餅花ハ俳諧の古き季寄ふ  
 もつてこれに二百年來諸国やもあるハ勿論ありちとろ江戶や  
 季よら守小児の子遊ふ作のあきまきとまきつ

斎の神勸進

我が塩沢近辺の風俗ハ正月十五日まへ七八歳より十二四までの  
 男の童ども奇の神勸進といふ事をもち守り富家の童ども  
 びあすハ楠木と上下より削り掛て鏝の形を作るこまこと三棒  
 とのこまこと二本大少まき上下ともやう童僕ハ一升ますとめて  
 せ又ハいもあつてこびあつるあつるの中へ五六寸なりの木を頭  
 をり人形ふ作り目鼻とまきこまこと三つとりて女神男神と女神  
 ハかこ綿とまきせ紙めて作りたる衣服ハ紅めて梅の花をこ  
 るぐく男神ハ烏帽子をまきせ木とけりうけて鬘と守紙のい  
 ふく若松とまきこまきこまき紙かの井の月よまき奇の神勸進と  
 とよづりありて敢物の欲おもあらず正月まきこまきのこまき  
 こまき一人のこまきあらず見輩のこまき事ありこまきこまきこまき







正月十五日よある事京傳翁が引まゝる春ゆく志らるありそ  
 引春の中も明人の作日本風土記もあるはゆめにも我國のや  
 似たり以春ハ今より三百年むうりいせん日本の風俗を明人  
 聞てて春さるものねまは今我國ゆく小童のたをむとま  
 るの三百年むうりきたの風俗遠境もううりのるたあらし  
 京傳翁引る日本風土記 卷の二時今の部とあり漢文の 但街道  
 郷村の児童年十五八九已上及ぶ者各柳の枝を取り皮とをり  
 木刀は彫成を皮と以復外刀上小纏ひ用火焼黒め皮を  
 去り以黒白の花と分つ名つけて荷花蘭密とる再荆棘の  
 條を取香花神前小楠供次小集る各童手小木刀と執途は  
 隊前凡有婚无子の婦木刀と將て遍身赤之口は荷花蘭密  
 と舎ふかあ守女婦当年孕男と生我國ゆく児童等が人の

門を斗捧ゆくたき娘をだせ聲をだせとのまうはるく右の風  
 土記の俗習の遺事ちのるど

百樹案よ件の風土記小再び荆棘の條を取り香花神前小楠  
 といへる餅花を神棚へ供する事を聞て粥杖の事と混錯  
 しく記したるもるど一狀りともは餅花も古き祝事あり

○齋の神の祭

吾国正月十日小斎の神のまつりといふ所謂左義長あり  
 唐土小爆竹といふ唐人除夜の詩小竹爆竹千門の响燈狀方戸明あり  
 の句あをりし爆竹ハ大晦日よある事あり吾朝ゆくハ正月十五日  
 清凉殿の御庭ゆく青竹を焼きて正月の春始を火火焼く  
 天小奉るの义とて十八日ゆも又竹をわたり扇を結びつけ回  
 御庭ゆく焔玉を祝事とせさせ玉ふ民間ゆもさりとて字ひ



て正月十五日正月はだづりたるものかあつて燃すこと左義長  
 とて昔よりする事ありことを斎の神祭りといふも古き事な  
 り爆竹左義長の故事俳諧の季子寄年浪草小諸春と引く  
 くらゝくつるる。吾う郡中あつて小千谷といふ所ハ人家千戸ア  
 あまる饒地ありをともかふ斎の神の幸も。は川りも盛  
 大ありをともまつるその町よおのく毎年さごめの場  
 所ありその所の雪をさごめとてめらるる三間たりふ  
 周りたる高さ六七尺の四き壇を雪あて作りこまふ二処  
 の上階を作ることとも雪あてする里俗呼て城といふこと  
 壇の中央小杉のあまの木をたて柱とて正月さるるものあふ  
 られをぬくる柱ふむまひつけ又ハ積あげて七五三とつて上  
 よりむまひめぐりて蓑のこととてあま

大根注連といふもの左右は開る扇をつけ飛鳥の状と作  
 つける壇の上の席をまひつけ神酒をさる此町の長なるもの  
 礼服をつけ拜をまひ所誓昌の幸福をいめる以事をさるる  
 きよめたる火を四隅より移り油滓を火のうり易きやうに  
 なるかゝるも燃々熾ると状あがる此火あつて餅とせまてくう病をこのぞく  
 とく世ふあうくあり一事であり  
 是則爆竹左義長あり他国あてもある事あり或人の話ハ以事  
 百余年前までハ江戸あもありしが火災をさるるたれふ禁下て  
 やうにさるる○さて又おんべの物を作りてその左義長小賢て  
 火をさるるせ焼を祝事と守おんべハ御幣の訛言ありその作  
 やうハ白紙と色うらとを数百枚つきあをせしるを細き幣束  
 のやうふまひさげまらふ扇の地紙の形をきりのさるる  
 数千あつて青竹あつて守大小長短ハ作る家の意ふ





斎の神祭事之図





備せたるを以て人小誇る棹の末ふひらき扇四ツをよせて扇  
 六家の紋をとりとりあぐくしり紙をて作るものもある甚く美事  
 ありさきを作つてまづおのこく門一建おき事五月の幟のあ  
 つしあり十五日ふりてかの場所一かちめき左義長おびごとく  
 焼捨るを祝いと一慰とを現る人群をけす、勿論事をとりては  
 ころのころて喜酒の宴をひらくことこれ 國君盛徳の餘澤  
 あり他所も左義長あまもまづ、小千谷を盛大とす  
 百樹曰余京水をきくごとく越後よ遊べし時此小千谷の人  
 岩淵氏 叔之老人の親族あり の家小節をきくことある事十四日八月あじ  
 の嗣子廿四五許号と岩居といふ唇をよきとて余よ遇せしこと  
 甚馬小千谷、北越の一市会商家鱗次とて百物備ざるこ  
 とあり海を去る事僅よ七里あるは魚類よ之からす

余塩沢あり、ハ四十余日其地海よ遠くして夏ハ海魚よ  
 乏しく江戸者の口よ魚肉の上らるる事四十余日小千谷  
 おいしくて生鯛と喰せし美味あり、事いこの  
 らす又鮭の時節やく小千谷の前川ハ海よ朝まるの大河を  
 ハ今捕しをきく不庖丁も味をい江戸よまゝとあり一日鮭とてん  
 ぷらと物やしてせり余岩居よむいこむは地地あり  
 名を何とよふと問ひし岩居これハテンプラとあり我  
 とてろ地物の名義曉しが、古老よたづねし人もある人  
 きらあや先生の説をきくんとし余答てまづ食終てテン  
 プラの来由を語つし、いひつ、鮭のてんぷらと飽ちて喰せり  
 ○てんぷらの説。煉羊羹の起原  
 岩居よ語て曰今をさる事五十余年前天明の初年大阪



ちく家僕四五人もつゝふなりの次男年廿七八をり利助とのふ  
 ものその身よりその言もうへの奇妓をつれてや奔一江戸下  
 り余が家の京橋南街 對いの裏屋に住し一日事の序ふありて  
 余が家よ来りしより常はせ入して家僕のやうに使ふをせ  
 けるふ花柳の身と果しつゝものもえをまのいおのりつゝ  
 もありつゝよく用を弁ふるもえをきき人よ銭がなりとて亡兄  
 をたむむといふもえをある利助のやう江戸の胡麻揚の辻  
 賣多し大阪までつけあげつゝ魚肉のつけあげあまらう多きものま  
 り江戸のりまご魚のつけあげと夜をせよる人ありやまをんを  
 うらんとおのりつゝ亡兄京傳のいふによきおのりつゝありまご  
 うらむつゝとて俄に調りさせしつゝおも美味あり利助の  
 うらむを夜をせの辻ふらうらふその行灯は魚のこまあげとまご

きんもあやめをらまをりつゝあやめを名をつけし玉のこととひ  
 けしは亡兄をららるゝもあんにて筆ととり天裁羅とかきつゝ  
 とせむに利助不審の息をとり天裁羅といひつゝ所謂  
 うとの亡兄うちをらつゝ足下は今天竺浪人ありつゝ江戸  
 一きつゝて賣創る物もある天からあり是も裁羅といふ字と下し  
 つゝ裁羅は小麦の粉あてつゝ羅はうまものともいふ字あり小麦  
 の粉のうすものをうけつゝのふ夏ありと戯言云とけしは利助も  
 洒落する男もある天竺浪人のつぎもある天からいひつゝ  
 大あよろろひやうて妓店をいひつゝ時あんと持きつゝて字と  
 こいへるも余がをきおき時天裁羅と大昏して与しふ裁てん  
 がつ四銭まで毎夜うらきつゝ程ありさして一月もたつゝ  
 小近辺所とよてんつゝの夜をせのて今も天裁羅の名油のつゝ

雪譜二紙巻之中  
 文海堂  
 廿七



世上お傳染つゝり以小千谷までゆてんがの名をとり一奇  
 事とのづゝとされども京傳翁が名づけ親まで利助が賣るゝめ  
 たりといひある。碩学鴻儒の大先生も老々々々守てんがらの講  
 釈もろく天下よ我一人ありとなむまければ岩居も手とちて  
 笑ひりり。先年以てんがらの話を友人静廬翁よ語りり。ふ  
 翁ハ和漢の博達 明人黄一正 夷食の部よてんがらよ  
 時鳴の聞人あり 翁曰事物紺珠 作廿四卷 似たる名ありきとて  
 不刺とありて注よ。葱。椒。油。醬。と熬後より鴨或ハ雞。  
 鶯とつゝと慢火あて養熟とあり蟹とあつげよまらむ見えり  
 ○さて天麸羅の播布よ類せる事あり因よ記す。橘菴漫筆  
 享和元年京 の田仲宣作 京師下河原よ佐野屋嘉玄術といふの享保  
 年中長寄より上京して初て大碓十二の食卓と料理し

弘めたる是京師浪花小食卓料理の初とや嘉玄術娘とんとい  
 つるもの老婆とありて近ひまぐ存命せり則今の佐野屋祖ふ  
 り大坂あまかきこれ食卓料理ある弘りたれど野堂町の貴  
 徳齋をいへくつゞきとてあまひ  
 夜々の友蓉岳来ア 揮毫とらふ 余が酒をこのまがると聞て家製か  
 了とて煉羊羹を惠ぬ味い江戸小同ド余越後よねりやうんを  
 賞味して大よ感嘆一岩居よ謂曰おねりやうんも近年のもの  
 あり常のやうんよさらば味いませり吾がとて常  
 のやうんよさらば口ふ入らざり。ふ江戸をさる事遠き  
 以地もや来逢のねりやうかんあるは実よ大平の徳化ありとい  
 ふ蓉岳も昏画とてし文事ありて好事ものなれども  
 きつていざとまの菓子ハ吾が家産ありねりやうんと近來の





かのころ由来と示し玉つる余らうていふの寛政のころの  
 江戸日本橋通一町目よと町字を式部小路といふ所小喜太郎  
 とて夫婦より推いとうをつひ菓子屋とい見えぬ隔子造は  
 かんざんもかたぎで小喜太郎いせんハ 貴重きこうの御菓子と調進  
 まる家の菓子杜氏あるより奉公をせめておふ住し極製ごくせいの  
 菓子をうをせいで茶人又富家のころあまをひたりとて以者  
 が工風とてちがいで煉羊羹と名づけてうりける羊羹本字ハ羊用  
多事純流日録  
 小喜太郎がぬりやうかんとして人々めづらかりてめでたまふぬるれ  
 ども一人一ちめてせのころの急げふらうりきりたりとてつひの  
 重箱むか空しくする事なるとぬりころ余が目前まへたる所ありかく  
 て二年の間小菓子や二軒や喜太郎をまひてぬりやうめんと  
 せのころめづらかりし今ハ江戸の菓子やさらあり追ひ引り出

小千谷もあまはが女国は市会とある所ハこれらありあふく又  
 諸国もあまはがとひるもあまはが岩岳とらうて小倉羹とあり八重が  
 ころんかありあまはがあまはがとらうてころんからの事雪譜の名ふ  
 ハ似に気があまはが弁べんとて本文小千谷の事をいふおむいごたれハ  
 人の話柄ことばよ記しよりあまはが近古食類きんこじきるいの起原きげんとぬりあまはが余が食  
 物もの公華考こう小上古よりあまはが挙あてまらうたまはがころふいむらせり  
 雪中ゆきなかの狼おおかみ

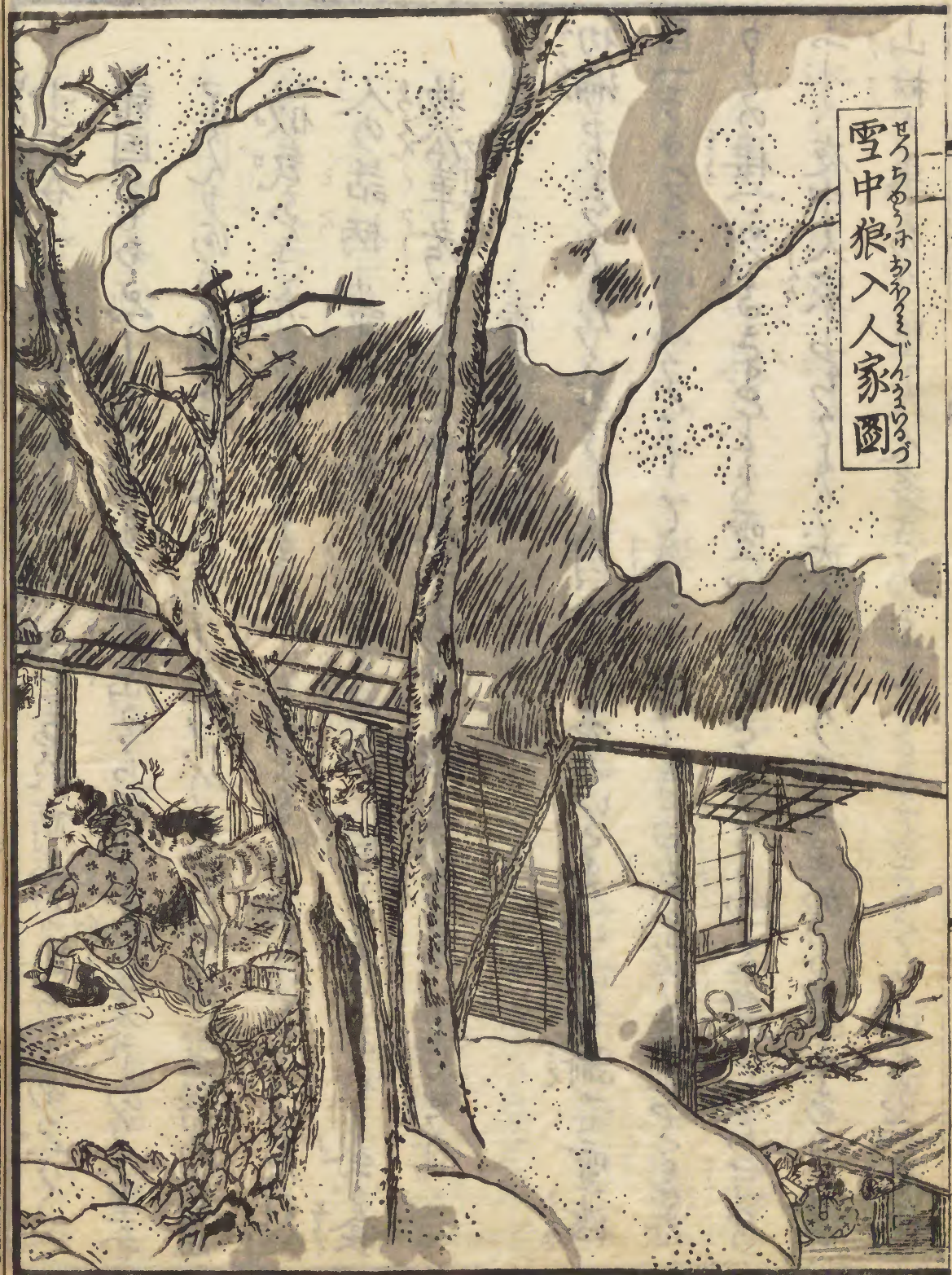
初編あはらの中なかもあまはがたるもわが我國の獣けもの冬ふゆ小いさまはが山を踰こて雪ゆき渡わた  
 目めいさのころ雪ゆきあふくして食くふとわがころあまはが春はるあまはが  
 りの棲すまいころあまはが雪ゆきのころあまはが食くふたらうて  
 ころあまはが夜中人家よなかじんかあまはが犬いぬあまはが又人よかると事ことありとて  
 山村やまのむらの事ことあり里さとあまはが人多おほくきとあまはがころあまはが雪ゆき中なか





七  
雪  
中  
狼  
入  
人  
家  
圖

卅



雪  
中  
狼  
入  
人  
家  
圖

七  
走  
雪  
言  
二  
卷  
七





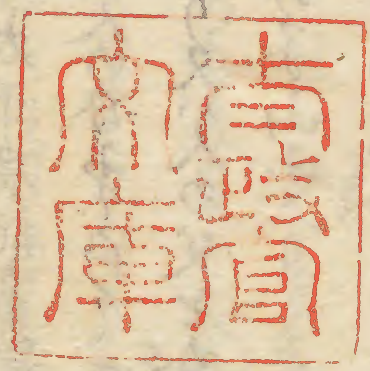
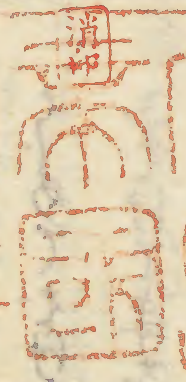






籍。狼戾。狼狽。をい皆彼。譬て是をのまあり。披沙。さきこい  
 獣中最可惡。狼あり余竊。以為狼ハ狼中。て狼ありを  
 とも人ありて狼あるハよ。狼をのくすゆ。狼あるを  
 こせす。こもつる。ふ狼毒。をくく。人あり人の狼あるを  
 狼の狼あるよりも。可惧可惡。篤実を外面。と奸慾。と内  
 心。と狼者。とのひ。嫉と悍戾。を狼老婆。とのふ。巧。狼心  
 をくく。可。識者。の心眼。ハ明鏡。あり。おろ。く。堪。を

んや取ららんや



北越雪譜中巻終



